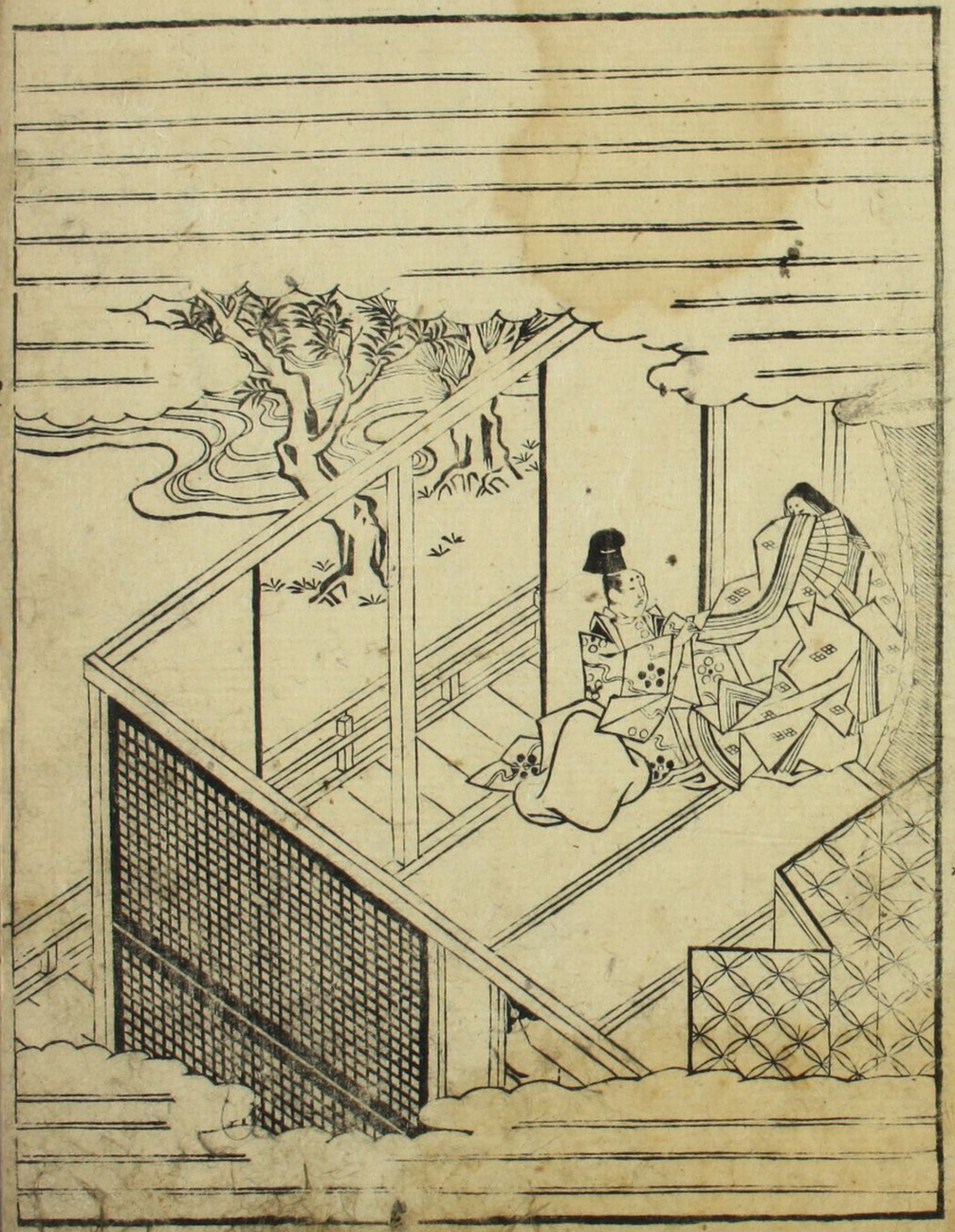
絵入
とうぶんうら十帖 十



ゑりてあゝおはゆめとくしてこそあづけ置しはよりぬ
るのもさらん又も来る世ゆへんとてつまてくゝり三ぞう
あさりまちいさ此家まうけて志のひくおかせよとも
くもつくまゝうんくいひとそてこゝくいくりの不便
ひさらうむこれせうしやうかせんざいとすめむとあ
いすぐ然んたすくそひふしうり小のくさ

かね
志めゆゑひ小萩が今ぞまよのぬ小ば家にうつり世縁そ
三やこ雅く小萩かりくしてまぜへ家もゐとけ浮あまえ

三条乃姫君より母のかたへ

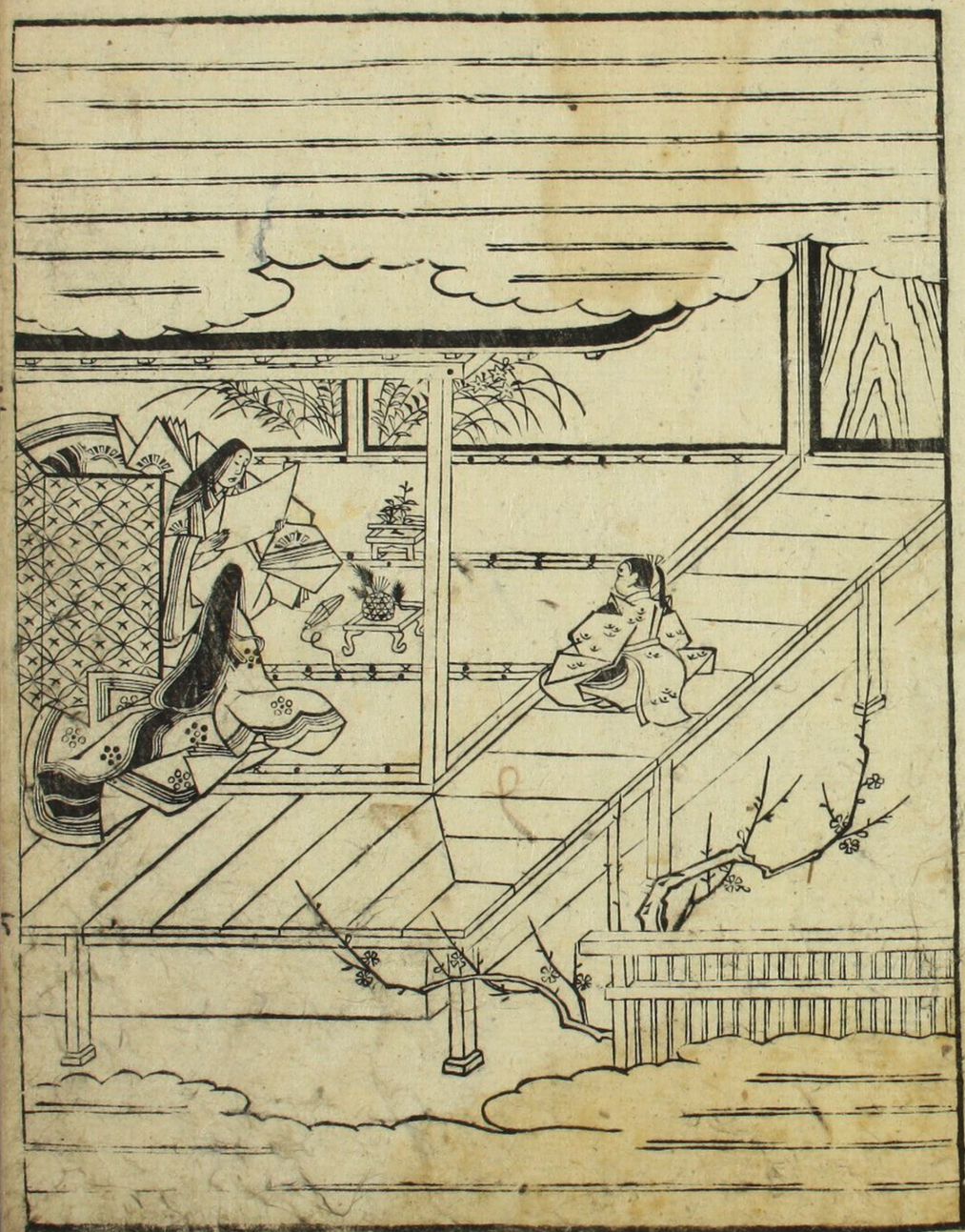
ちの方
ひさうれは是かほど世中にわくぬかとおもひはおもしうれ
うれしさかぬかねふかりしめて是君はたらとみつよりも家
太ねも秋乃こゝろ定治の浦母にうれくりしてうつりこそ
ておそらしうり　かり

たれそれ清水にすさる人のかうけとなりあさらん

年丸わかまのうちれ立より抛捨しかふみおそよ姫君の
るのことひおよびこる抛つとて三条の小家よわかつてとえ
あひりしとくうりしかされりさあくかわまるの家に来り
てられつまくこされりの母年三条へゆきてこの
よいひされは姫君もめれともめてうしとうんと見し
人の浦を波これいこれくおかりとよひるの雅よ定治
よりと人来れりとそ門をたくあけさせられはうかう
そうせまへり様ころひあまうのもひは浮くさせん
とそとれのおめれとい母君の浮くさせんとのふみ
これひろしよあかしつゝろりて入なる母のうちれを
そう浮もむろやらおとはさあまや丸おまの雅の家を紙か
雅てあうあけぬらりてあかされこゝ志しててそうとも
志ぬるれりしてゆくもとこ母か抛いてさうへかふめ
やうかりと見んなあふあしく波のうかへすくれにはせさ

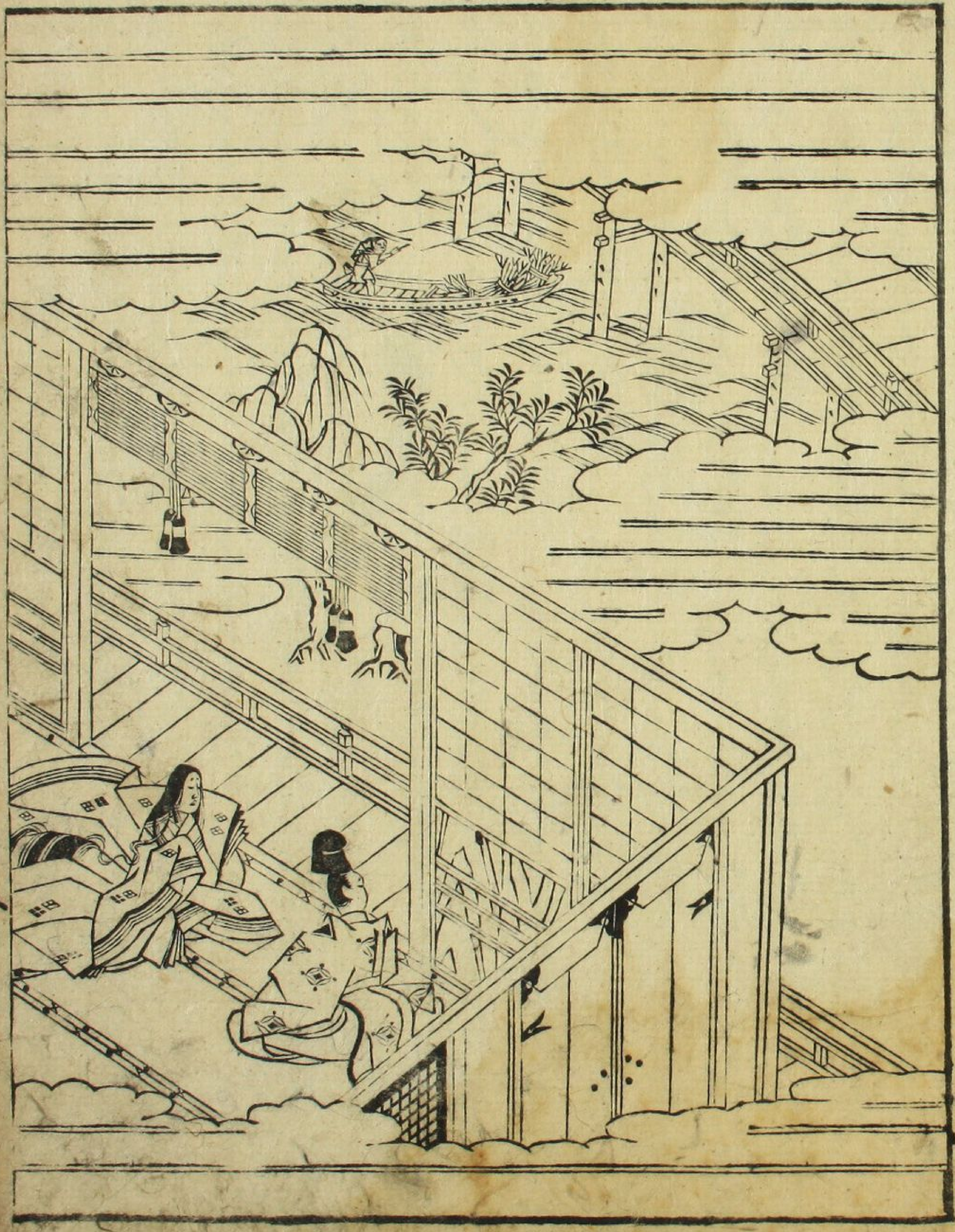
されどもみづからのうき世中すがた又よひけくとも私よつけ
又さて父にもさへて来れりやりかくひくといへくよら
そもしひまの中君兄ハ守治よ大臣の若君のかひさと
めれのうちとめりて乃ゆ人ハ白糸どりてかんの御ふよりや
つハ今の父とハかんぬきやたまり文づらつきくなく
乃末のさきたまりしふしんよおかしかきれぬまくまつり
出よらひかかと流くりて
まづぶうりぬ抱はおれん君の扇ハ兄はよちゆとさへさん
白父おいよおかしめととハゆりのぶうちへのひまのひそようも
そまりのかつさ反人とうて玉よりかくしく大内記と
てかりく今さてしきたりわかれしてとひまのよ
守治まれ御まてハ君ひまとかりのもとえと見すよ女わらと
かまとその人ハ秋月そめし今すぬきかりれるのとそれよ
なりそれかわぬれたもうらてかんさめんとよりくもろ将ふ
守治へおそくらくののる人のわりくまハまくてわし源乃

ひまとまり人くうしのひまよりのもとえまへハ大守のりて抱
ぬかへ人三位人へよもハ糸納よる大きそといひよりくもりまき
姫君ハかりのかを抱きてお(わ)つりもよ便中ヘてお見わりて
秋つもしてきさくうち抱くもハさちへやにらうけて
みすかりより姫君ハ大守と納おくれふうせまへりいなせん
さうくそわかしをれくさまへハ大守をもつけて出よらか
かされさよみせて入せまひ居すそおそろくきやうれまき
てかくりてききもろくにきりゆり出納へくせまくそ入
まふうんハかりつすりしまさよ流てぬきて打ちてきん
きハ女君おくぬ人まりしもおかつれくてしとをぞれし
あふれ秋あけて流きりの人あハつくれくきへくそあり
うんと乃まハ母君よりかるふハ流むくへまりへいへふそしゆう
ゆきんしいへハうふ抱のまさまりしいへてし姫君乃まよ
目たちくすりかけれ母君もり流むきの人まりりて出よ
まうでさせんとそ東ふま洲るすくまくちを延すうく



とのさまふ　ふかり
女房 うら橋のまへ髪ゆひにせとおやこひとこれにそうろうか
女房 たかまのこせかおやこにそうら橋とうらせぬ拍子の次のあゆや
あらつきつりまふ
二月十日丸狛よりふ文あつりしきりし右衛門に御状ともへて
ひひるりてかへしまへていひもそへてまつるめれ
狛まて京へくもんしまつかへめしつくしうれ門よ
目とらうちつ家よつま狛乃んそ右近いふしと氏御状
とあれのせて時方にさゝはせて出女小橋の小路とかきと
女
年ふ先かつん拍子橋のまのさそれのちつきうるふ
橋乃うまのきつはとゝいゝ先へつて御来てまぬ
まれさしつきあかりまふ（先年にふるき鮫ヶ淵のことなりこれ）
女房のさかうりうへりかうり御にすゝの狛まて今は
めし御ほてとあらしれつくとあつく時方とあらし
とえのくは拍子りしてくしろう雪ふり流乃り山つかみえ

とうけうやうりよまらくいさ夕日にうつやまさらに沖へ出かゝ
らし左のかはしとかまりまうひろくいらうるま
浮舟 嵐の雪みまさうの後ふとぬて来るかそのかるふ左衛門かう記
名みるれもうれ髪かも雪よりもおつきおもかそ親へけぬ〳〵さ
そ云みそれるれおもはるさせてこゝまゐのよりかきうへあへり
よろ川ぞこひあれして秋ふかくうへりあまふ右をつかましとさか
ちもちへなうやまそも先よりさのあまてうへりまふ毎ふうちの白文
うまやみかきそ事の雪もたらぬまそ定まさ今日はあのひまさ
あのもしとりうつ大狛氏よりは浮舟あり
浮舟 水のまうちとちれ里へいつらるんさまとはすろものにのえかひ
匂宮 おしつる里れかくる狛それ恋まへん出立つのうちのかもりてそうろに
月 うえらし是れせ御君のあまの雪にさそてせとふう大夫まさか
匂宮 おつかまとくし身ふるうらし海のそゆやまね入紺ゆくへいつしみまき海さめて
三条の家ぬへうてわつらしまうんうの月九の志てしあの十六かの
志を文よりのうひ待よりまれかまう文さくつへあへり流めれ



このしまかや三月つごもりはねかすへてまかれハまさきぬよ
まさきんとありけるかくて宿へもひさりかへに紀かねへ
いふ志すなとへ參らせうちしてふかきぞ母志宿
後へおくりけれてすでにあそとおもしろ紀年礼
あまり紀よりて竹花をさりすくひけつそれども紀年
こさそてもうち志ひつくられはまれぞのゝそろくひく
まつけてこ秋月后来を志てとすりかへ志らすてあへ
くらひまかめへ人へよう紀のすてあらんとおほとつの家
よりうかるよりふも沖彼さあひさりかれ彼かんら
めて仰しれあくへいとひくまかそしとふくさうまよかき
てまうへとのふ稲かうてそしてあしよりへと待てかんさ
せされハ時方か家よ入りかりうはひくしき志るかりく
て文を後りれさう
波こゆる比志らず末の松まつらんとのみおもひけるかな
うきふねのうき名ハひとりふかりてさけ後文ハすまのやうあて

あさくへまやとてたゝしかへりぬ母は侍従右近うちつれてくる
まうでくる代をもせずなとゝいひつゝいかにもと右近は二ゝこのけ
しき代にそいの秋のゝとふきりのおもしろく見えさうらん
もなきこともかなしむすぢ見とてまもすかへかれしきうらふへいかうれ
あかりしさゝめよおもほりよ松かたけかせまのひを世せおもし
ろへおはてさむのしとつへりかうようさくねりよりくよ
おのこころりよ侍くやのしせつ侍もとへいとも松のひろしき
見えまひさうとおかりてものうしきかつくがれ
てあふかりふ文よりあかりてもおもひまさん母もちもうけ
もとは時うとへく侍従はおもひそいやうかたれにさとこさ
せんにそさそひ出かりえるに馬よそてと代くたちなるともう
とうねのぬしこうこさよかうりのへさやうてもおもて山
うけの浪乃のとれおかりとしそてあらしさそてまつ侍
従なりくあらう浪とうかりそて浪むへ人乃日代よくたゞうり
あへ秋も身をさそて出しくるせんようへまかりふ

さてあか身をかすそれし白雲のかかりらぬ山もおくくそあつ
侍従入てかわりつる風しさいうされとうしくへとうれ
しまうれわしまかりうさし子
うけさしひともとと日光まなけれ縁なかた爪とまなと見
おやもとひしくつ手まへと見ひ出ねちうかしも立し
くだんへはかりけくまたれ出てもへさゝうととび
めてし餘りま路ゆもとゆうれ子
かいとうれ世れ中とめはいうことそるしきまもうらん
母君からの華かりんおしもて御文ありうれ子
侍従よ文おひろんとに立さんは世れ家れかそ
うめのそれあるひさうれねとそへていよつさね君あまへは

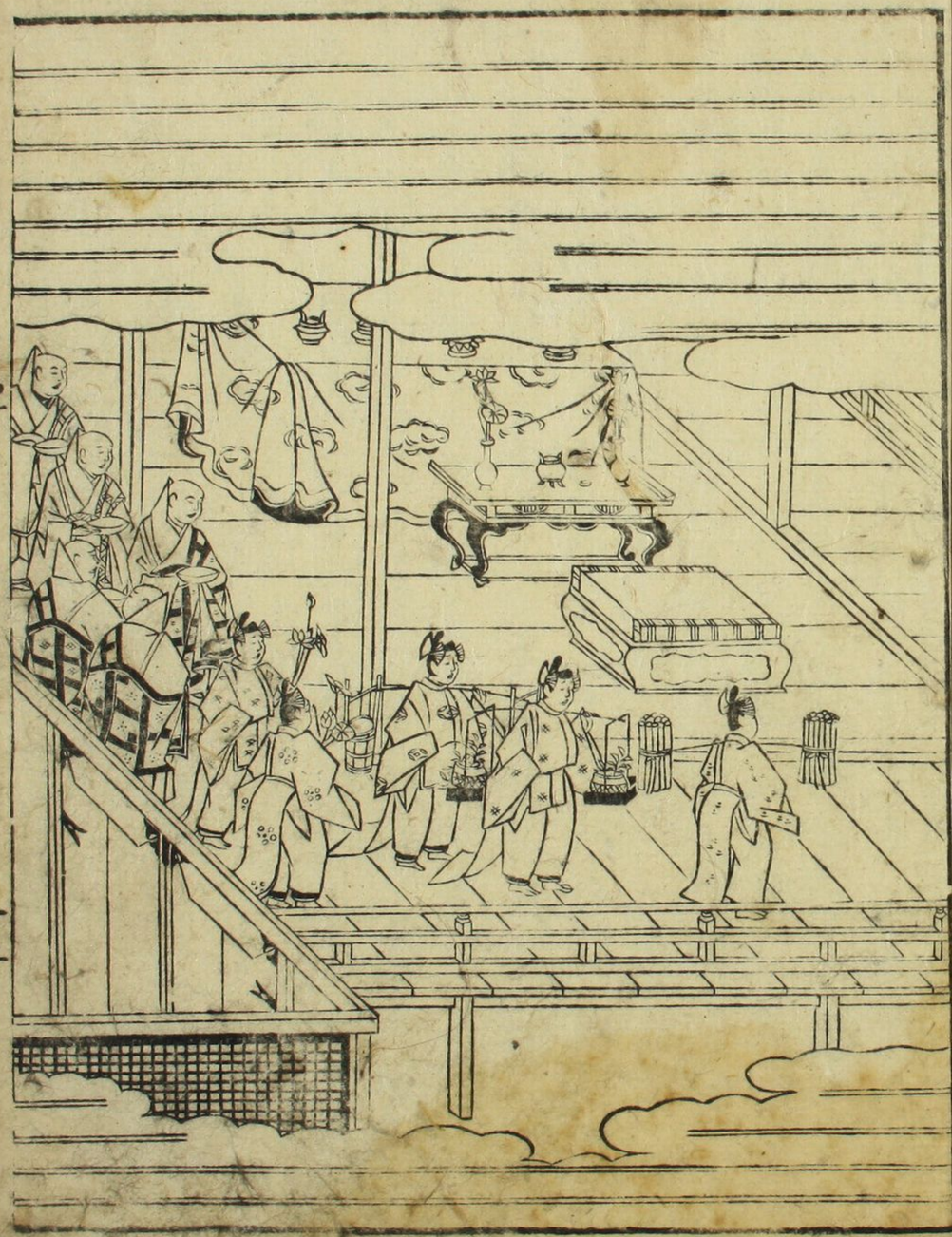
かけろふ　うかゝ井六子

宇治のゝかゝれなうのゝ君もりてもすくうせまへのあうりしこ
とゆらめさうけしうひすし母君てもかりして花やうひ

てん物やそらりてゆめうん自のまへよりなくあらうん
ハなのつゆのうへとあらそひまつりたる白ぎくの
かうしんまひしまとかれ枯ハぎ川よりうれうせりう
ちうるるかめりまりまつ時ちくまりてはせ
中とたれもうてうちうてうちうるあるまうちうる
うるるるうちやちひんとひいてうくあばうう
無ちハぎうるれ者とゆまりひあくうくてゆりま
外自よりてうりまりうまう
君のやうちうまでのあるんうくう
うま樽のうりうあうりハかりうてうちうるれ
かりうう信ハかりうまりて
秋ちうるるうるれやうあのみと思うん
あるりありてうくうよ浴れうるうちうう宮ふ
まりうふうちうたるうつがうこうひうくまりう中
ちうちうるれたのひてかうひ

まゝ一品の宮乃小さいしやうハかれうきひとりもあめ
こひわたり給ふ事なとありしかハ
　哀しる心ハ人におくれねとかすならぬ身にきえつゝそふる
かをる
　常なしとこゝら世を見るうき身たに人のしるまてなけきやハする
源
故六条院乃御ためむらさきの上なとの御ため八講しめさせ
乃こゝろさしにて御経仏くやうせさせ給ふ
大将殿ハ御すゝのかうれにおはしてめのつきて
あり小宰相やあるとのたまへハ一の御方に三人ハまたる
ぬて殿と御のかうれに西くまろ人こゝろにかけてさしのそき
人ひとりなきにあらねとそれともおもひかけす
御かうし見えかくれて一の宮ひきあけさせ給ひて氷を
女一の宮
さしこ小宰相もひとおほひのもとにてたかくをもちてあそひ
さやうつくしきにおかしく見えさせ給ふおはしましを
おもひいたまふに見ゆるハなくさめかたくさへあり
しさきてもあさましく御らんし給ふ女二の宮

まれハ大将殿たちよりてくれのおくへ
かかるつねにおはしける女二の宮のうちとけしにおほしけ
まつる女一の宮にまさりたまふやうにておほしつゝ
われてたちまちしてあつかりしにはなやかにまさりて
ことせなかれ給ひてなれもそのあやしきるおもはゆき
ことの御かたへまいり給ひけれはよそにまつりし
みせたまへるゆへにおもひなしのおりから女宮
うちあかしたえのあかりてうすものゝ御ぞを
まといとつまにゑかゝせてまゐらせたまふ
つれにて女一の宮乃女二の宮とにたまふ
かくれ給ひて大将のひのおもかけそふ
中宮の御方へまいりてそのかくるをみそかにすいし
よこととおもはるけ一品の宮より二の宮へ給
わかくて大将殿のおもてかけなくいとせめて
かの大将の十四五乃女一の宮のこいしさのあまり
よせてまいらせて



[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

いのり車うちはらひて居たるゆとのもせ小野にいてゝ
つゆくさとしてあさあけのもりこゑ
ゆくとうるあるこゑ
ゆくとうるあるこゑ
ゆくとうるあるこゑ
ゆくとうるあるこゑ
ゆくとうるあるこゑ
ゆくとうるあるこゑ
ゆくとうるあるこゑ
ゆくとうるあるこゑ
ゆくとうるあるこゑ

すりおもしろくてかへりみられせしと云ひしかばわかれきて
ひさしぬれはすてゝ見く此男さへえ世にへて後の人も
八えゝもと今人の心にあたとけ八おもハれ日数をへにけるに
ね八よめかみ身を思ひつゞけんとてうつくしうみえひかり
云ふもいとおしくてさつとはすへり日ころハ物あはれにて
まことに今ハ家つゞりのゆかしき身とはまた思ひね
ていかれハたのしけなくおもはしもすぐしかひな
まふおもよをさせまへしおもふハいつかたきへ見乃すまふ
いてもしけすうち春とりそのかみ八なか世ふしてい
たゝきたりとも見ゆくしてのみかけにせくそらかたる
せめて八此あまの君八たいへなちあゆみのうちすかしつきく此
てひとめひとりとゝつきより見えぬもの世ひとおもて云ひ
云ひなりひけりにこのひとめつく此のけれハかたりとかく
かの山里にかりすみ秋よりけれハ門田のいねかりしそて女
ともハ斗にひたひきなりともおりしけん

身をうぢ河の名をやさしと思ひかけてたまさかにとふめり
秋くれて見し世の中にめくれたまへる秋のそれ
母君め見ゝとも述すくもありくと云ひやる
はあまの君れひとは中将まてすのせんじれ云てひあへ
ふたゝびてよ小野よおりしらハあま君もあんしてゐるに
るえかくらすふかね乃なにかよりひそすれひまよりうち
されともの見しつるハ雅まりしと云ひやる　あまきみへおかりね
ん人さへすみて船をさしつゝきかゝて又の日山より
つりすふとて中将又きたりてはひあまきみへいりすゞ
せちうしこゝのふかつるなくさめにやとこひしく　中将
わき風ふきひくあたのものかれもあゆみんたと見くも
うきつハこゝてまし飯のゝ八　あま君
たちて云ひみえれね女郎花見世もしく者れぬ
八月十日あまりに小鷹かりのついでにおハして　中将
松虫のこゑをたづねてきつれどもまた荻原の露にまよひぬ

山里乃秋の哀ふかく紀哀をしく物ふかく人ハあはれひとしほしれ
ものうひ紀伊にひたすらなる人を物ゝふ人〳〵らもなさけ
一かたの文法物乃道にはやゝみせずひかぢのさめ作物あり
させずふつゆそれ立よりまへつれ手習紀三つゝめんとし
ておまれずんりとゝいそらせずふまゆせよりおまの上ゝ
せずひるんかすう紀さ薄けまうんよかれしき将すりとそ
ひさいかそつそうせずひそわまうちよくうおかさせまへ
とうりりもおさうつちして
たすえかの心有とも人とてとゝひつてとゝ世級を作て捨つる
手習や　かさりそとし心ひかりは世中とし人をもとのさぬうぶ
中ねこて　器量紀くら紀おろんおまえれのりと道としいそうてうか
手習や　ゆとそう紀世乃ふとゝかれ道来てねおまみ人とゝ来と
たろせうりお母ゝへりのひて吟くと玄乃るのまて紙よ
いのりとよいそてくわまうふハなうてまつとうけさゝて
まうひまへり　一かたの文乃作るやゝおこそせずひ中文

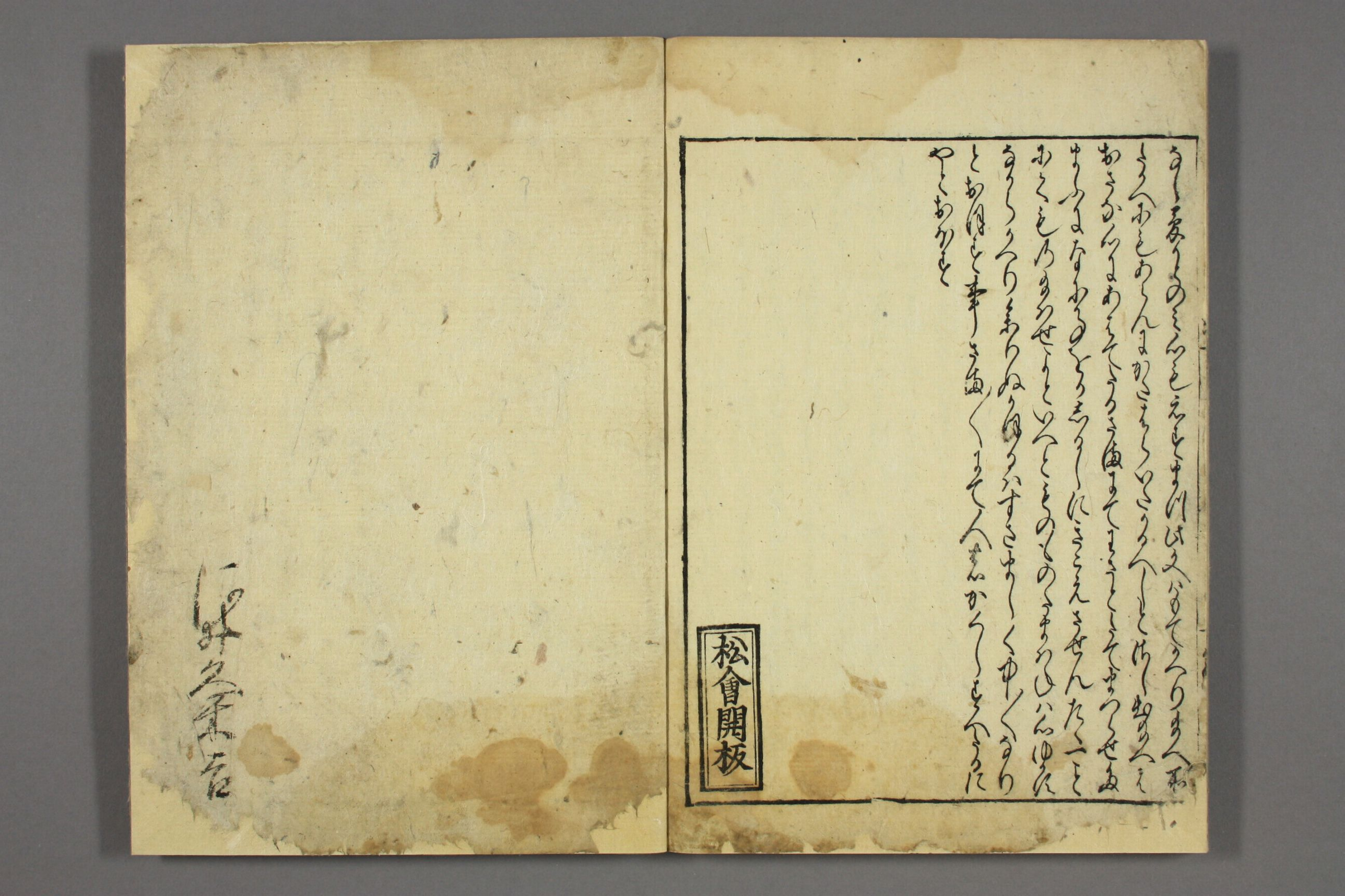
後拾よいかへしまひて初瀬乃底までうるた紀申次人
つけらうしるかかうのすかふ　中ゑ　湯とかつしわかとるれその
人わやわらん大将よこうせ手本ておはしまり
小野しへ中納あつしりわまさ
中ね　月
これへの吹か山乃すり小六宗つへとへきつけさかをなれ
中ね　まれへとへわしとふ山里の二季三紀めつてら紀ても事う紀
大かお世代も紀ろ三面れとしての世そ身ゝそつくされ
手習乃事も以後よりし法文おかりくゝかまひて年とも金殿
手習　紀人々没井山乃雪代ゆめてもふうりふしかのそ家ふてみさき
わまき　山里乃雪まのう分のとしやう紀おひさ紀乃そのまちてみか
手ね　雪ふゑ紀井への分かて今ゆらハ玄のためかて年も人へ言
月
神やのとしへそみなは花の表乃それとおかふ兼乃あけなか
大わま美の縁こうのこうりてかり大将乃統かくら
後へゆうりてかけさま（かるめ）へしるうとかう水代のそ紀へ又の
かりてもうしらよう紀付まつる所

君ハかげも女のねがひのこれあらんと候いとくせられけるを
こまつ殿にてくまなくしひ乃ぶ
か御家の御まつりの方小やかし世に御くらの御ゐびけて子のぶん
毎ふかり志あやうの清のかりのへ移び中文よの事り〻下りて（中文の羽）
宗治ふいとふりくしき趣やさをもしんいのやそりて後へハ家
〳〵脱ゆるところをひらふ小宰相侍従乃以同じうけとるとうらうら
事くこらへ八今もわらんの中の乃御へハおまんにあまりしつよし
もうの以うるしかさりゆきと

菊乃うへ花ちし

かの山のおしうて文の日横川によつて浪はらこらん御
攝津しかふま小野（名のかり）まそて泣つまあなよけてやまし脱しへハ
親あかへまて親ゆくこけうくかうり出のふ侍（侍従）もどもよたぐ人
〳〵もらうれとてあきれありくらうりのふさわらハ
御文を孫りてけまくれまつへさんてたつねさくへあり

とりかくせおへくとひ小宰相殿乃わりの中らんとあかせて人あ
あかくて文の日つるさう（小宰相ハ見あかりて）あまふ見おもつてそて道理の
宰よ文をと見せおへハおりてありそいつへみさせうてありふ
（わまあ羽）ひ小宰相ハ主まかりありしまするとせあくまてくりんまへ八ツ
（のか）ひみハいまうりて世ゆえのひ時母れつまて宗治へも事れ同じへ
（八まつりの羽）わ中きさ海によかりてかんにを阿りへ母宰ちらり
とさつよ中川かうくらと源八あらぬ小宰相関よりまへんとて
まへへ事まへれさいめんせまりしくさひ御のひかりてしてひ
すしかうてまへとを（わまあ羽）後よあくまへハわし地とも小宰相
関よとしよせあへ小宰相ハ御疾のりゆかりてまいらんと
いそくわまへ御文とひきさうてかんせまへハあまし
まうくの御文おくうかう
のりれしくろあゆみちをとろくへあく
おもつね山もふるみもふか
つらうれみせりせつれらすとひ出まてあかりはうの事をも



松會開板